

# 西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.35 2008年7月号

最近読んだ松下幸之助さん（言うまでもなく、松下電器産業を創業した方で、生前「経営の神様」と呼ばれた方です）の本に書かれていたお話をご紹介します。松下さんは高校野球が好きだったそうで、それにちなんでお話された内容です。

「選抜野球試合に（中略）何百万という人が引きつけられて、あれを見ています。聴いています。なぜでしょうか。それはあの選手の人々がまったく真剣である。勝っても泣き、負けても泣くというような真剣味が、何万の観衆を引きつけ、何百万の聴取者に感動を与えるもんだと思うんです。（中略）しかし、（中略）皆さんがなさんとすること（仕事）は（中略）、それ以上にもっと力強い自分の天職としてやる。その天職にあれだけの熱意がないということは、私はウソだと思うんであります。ああいう野球の選手が勝っても泣き、負けても泣くというような、全身全霊を打ち込んでいるというようなその姿が、皆さんの仕事の面に現れたならば、私は、同じように天下の耳目を集中することができると思うんです。そのあなたの仕事が発展しないことはない、そのあなたの仕事によって多くの人が幸せにならないことはないと思います。その会社が発展しないことはないと思うんです。その人々を擁した業界というものは発展する、そういう業界を擁した日本というものは発展すると、私は思うんであります。日本の繁栄も国民の幸せも、お互いの双肩にかかっているということはいえるじゃありませんか。どうか皆さん、職業をもたれた以上は、ひとつうんとがんばっていただきたい。」

今の自分の仕事を「天職」と思わずに、「天職」を捜し求めて仕事を変えることやそのためにフリーターとなっている例がめずらしくなくなっています。でも、どこかでその仕事を一所懸命にやらなければ、その仕事に興味も熱意も湧かず、道はひらけてこないということなのでしょうね。

ただ、松下さんは次のようなお話もされています。「しかし、朝起きて晩まで緊張すくめですと、これは疲れますからね。一所懸命やるという心持ちと同時に、息抜きというようなことも、それは必要でありましょう。（中略）心の底にはその精神（一所懸命やる）というものをぐっと握ってやらなくてはならんかと思うんであります。」

